

1 回生入学（昭和29・3・31 発行）

校誌『熱田』創刊号 蹴球クラブより

蹴球クラブが誕生したのは昭和28年6月半ばを過ぎていた。クラブ員は——佐々木元彦、鬼頭康夫、前田裕彦、村瀬勝久、熊崎富次、山田勝博、関谷吟吉、伊藤勉、波田忠、田中亨の諸君と私であった。その後大口勝正君続いて、下出義朗君、立川収、野々垣綱光の両君がクラブに所属した。

長い今年の梅雨も漸く、7月に入ってあがり、練習を始めたが、何しろ蹴球を見たことのない連中ばかりである。だから唯一人として、ボールを蹴ったこともなければ触れたこともない。

グラウンドは、コンクリートと石と雑草で練習はこの状態では容易でない。それにゴールもない。ネットもない。然し、我々クラブ員は建設の意気に燃えていた。

夏休みになる2・3日前に、待望のゴールが完成した。殺風景な運動場に真白いゴールは精彩を放った。然し練習の半分以上の時間を、石拾いや整地にさかねばならない。練習方法もわからない。ボールを無茶苦茶に蹴っている程度である。いづれにしても自分達の手で解決してゆかねばならないという気持は、クラブ員の一人一人に滲みわたり一層クラブの団結に拍車をかけた。

クラブ員に相談して、夏休みの練習にパンツとストッキングだけ間に合せ約10日間の練習を実施した。第2学期に入り、靴（サッカーシューズ）を履いて、練習ができるようになった。それで一応計画を立て、月、火、水の3日間を練習日に決め、進んだが、色々の行事や個人的な都合で練習を休まねばならぬ日も多かった。



運動場の記録<校誌 創刊号より>

一学期の行事計画の検討健闘の時、「秋の体育祭について」、協議したが、この荒れ果てている運動場では、どうしても使用不可能、生徒はとて、走れないであろうという結論さえ出たほどである。それは全く驚くほどひどく『運動場』と名をつけるには……にも縁遠く空爆による残骸の跡は、ライブ誌あたりにのせて、「残骸の跡」と題して海外に紹介してもらいたい位である。

最初の対外試合風景（対中村高）

その頃、クラブ員は一度試合をしてみたいという気持ちが横溢してきた。そのような状態のやさき中村高校から試合の申込みを受け、クラブ員は非常に喜んだ。

昭和29年1月8日午後2時より本校グラウンドにおいて試合を開始した。この対戦が、蹴球



クラブの最初の試合であった。その結果は本校2対1中村で第1戦を飾ったわけである。この試合に刺激されて、クラブ員も本格的に練習を開始した。



第2戦は、2月10日午後3時40分本校のキックオフにより試合を開始、瑞陵高と対戦、本校0対1瑞陵で惜敗した。以上の2試合では、われわれの実力がどの程度であるか全く不明である。練習の方法や練習量についても他校の程度

がわからないので体力の充実とチーム・ワークに意をそそいで練習を続けた。いよいよ実力を験す機会がきた。それは3月26日に神宮公園サッカー場においての名古屋、尾張地区の試合である。本校サッカークラブの公式試合の参加である。相手チームは半田高である。試合は延長戦の末、半田3対2本校の結果であった。この試合で惜敗したものの、我々は日頃の練習の実力を如何なく発揮した。校長先生も激励と応援をしてくださったが年令と体力の差は如何ともし難く、自滅した。われわれはこの試合を通して、多くのものを学んだ。コート・マナーにおいては決して他校より見劣りすることないと、自負している。

本校のサッカー・クラブが誕生して、僅か半年、紺のユニホームに胸の校章も白くますます闘志を燃やしている。1年目の歴史は築かれた。いよいよクラブも2年目である。一年生の諸君を迎えてチームの充実を期そう。檜舞台において、その蹴球熱田の名声を天下にとどろかすことも間近であろう。その意志は固く、その希望は大きい。われわれは、その日を夢みつつ今日も練習に励んでいる。春の陽光はグラウンド一杯にそそいでボールは大きく青空に弧を描いて飛びみだれている。（1回卒 花木幸春 記）

昭和28年度

初の練習試合 熱田2-0中村高

初の公式戦 熱田2-3半田高

第1回長距離競争大会成績(太字サッカー部員)

昭和29年1月30日 雪 午前9時55分

参加男子 コース距離10キロ

1位 1年 久田 幸汎 31分53秒

2位 1年 田中 享 31分53秒

3位 1年 大口 勝正 31分55秒

4位 1年 花木 幸春 32分29秒

5位 1年 前田 裕彦 32分31秒
第1回長距離走大会の風景

6位 1年 山田 稔

7位 1年 杉山 義彦

8位 1年 近藤 直彦

9位 1年 水野 巖

10位 1年 下出 義朗



問 校章にいわれありや

大いにあるのです。すなわち『あ』は「愛知」の『あ』であり、「熱田神宮」の『あ』です。『あ』の中心は剣を形どっているが、これはもちろん熱田神宮の神体にあやかっただけのもの。上部の横に引いたところは、鳥居に似せている。さらに意義深い点は、この校章には、ワクがないこと。これは「自由」にして、しかも「自主・自立」さらには「明朗」にして「健康」である、わが建校精神そのものズバリ、まことによく出来ています。(当時の新聞記事「高校の窓」⑤、記者と積木校長との問答より抜粋する)

昭和31年元旦 校旗樹立式

1・2 回生在校 (昭和 30・3・31 発行)

校誌『熱田』2号 サッカー部より

本校蹴球部も2年目を迎え、3月に半田高との公式戦に於いて延長戦に持ち込み、惜敗したものの部員大いに自信を持ち練習に励んだ。新学期に入り、1年生より村瀬、岩田、永島、西村、田中靖二、田中一誠、村瀬、志治、熊崎、鬼頭君等の10名を部員として迎え、部員27名になり、更に2年生より川本、服部、野々垣、堀田君等を迎えた。

4月、5月の公式戦にそなえて本県の雄刈谷高を招待し指導を受けた。これに刺激され、部員は増々日々の練習に身を入れ、5月の憲法発布記念大会に出場しました。本校は刈谷商高と対戦、善戦空しく、6対0と大敗して終わった。実力は如何ともし難く、次の試合のため黙々と練習をし、クラブ員の闘志も高揚し、毎日の練習に入った。

5月に入り本年度の国体予選が刈谷高校、刈谷グラウンドで開かれ、本校は市営グラウンド

で第1回戦岡崎工高と対戦、あいにく当日は雨天の泥中の試合となったが、日頃の練習の効果が漸くあらわれ、本校5対0岡崎工高に大勝した。なおその日はダブル・ヘッターで、5月に6対0と大敗した刈谷商高と対戦することになった。部員の闘志は高揚し、雨泥何するものと、グラウンドをかけまわり、選手みな泥んこ。前半0対0。雨は増々降って来る。選手も疲労の色が現れるが、後半5分、最後の力をふりしぼって戦っている。後3分、2分、1分、その時、本校のシュートが見事敵の堅陣を突破しゴール、続いて起こる終りのホイッスル。勝った、勝った。本校1対0刈谷商高で終わった。この試合は部員の忘れることの出来ないものとなるだろう。かくして1、2回戦を勝ち抜いて、次の日曜日は豊橋商高が相手、しかし意気天を突く本校の闘志を前には豊橋商高も屈した。本校4対2。いよいよ準決勝は昨年国体に出場した挙母と対戦、しかし本校は負傷者も足をひきずりながらの対戦、然し前半ペナルティキックによる1点を許しただけで、互角に戦ったが、実力は我々に利あらずして、本校0対4で終わったが、我々は本望であった。我々は優勝を夢見ていたが、この道の困難さを身にしみて感じた。

7月の名古屋地区大会は、23日より向陽高グラウンドで開始された。1回戦本校2対0中村、24日2日目、地元の雄、瑞陵高、これに勝てば本校の優勝の道が開けると思ったが、結果は本校0対6瑞陵高で思わぬ大敗を期した。

8月に入り全国的に有名な上野高との対戦もあやぶまれたが、校長先生の御配慮により8月3日遠征を試みた。この試合では10点はとられると思われていたが、結果は意外によく、本校1対4上野高であった。これによって我々部員は大いに気をよくした。夏休みも大半を練習に費やし、その間、上野高校先輩の松尾、稲森両氏の御指導を受け、自信をつけた。全日本選手権に参加しよう。今度こそ刈谷高、挙母高を破って出場しよう決心し、日々の練習に励んだ。

9月松蔭高との練習試合は、今迄の労がむくいられて、本校3対1松蔭に勝ち、続いて市民大会に大松氏の御配慮に鶴舞グラウンドに初めてスパイクの跡をつけた。相手は旭丘、菊里、向陽高の混成チームであった。前半風下の本校は不利であったが結果は、本校2対0で勝利し、自信を持ち、選手権大会を目標とした。

秋の日は短く、夕闇せまる中に、ボールの動き不順なるも、ボールと一体となって練習に練習を重ねた。試合が間近なため中間試験中も練習を続けた。予選の日がやって来た。第1戦は瑞陵高に苦戦したが、本校2対1瑞陵高でかろうじて勝った。第2戦の刈谷商高は1勝1負の宿敵である。試合は全く押しまわれ、試合に負けて勝敗に勝った試合であった。得点は本校1対0刈谷商高であった。いよいよ準決勝、11月3日対挙母高戦は向陽高グラウンドで行われた。我々にはこれには勝てると思っていた。実力に差はなく、ファイトがあれば勝てると思っていたが、結果は、本校1対3挙母高で、優勝も水の泡と化してしまった。続く三位決定戦も松蔭高に敗れる憂き目を見た。以上の試合で我々の今後の課題を見つけることが出来、1年半でこれだけ成長したことを喜んだ。12月中村高より招待を受け、練習試合を挙行し、前半1年生、後半2年生が出場し、前半0対0、後半4対0で打ち破った

新年を迎え1年生より山田、江角両君を迎え更に充実した。1月22日鶴見、佐野両顧問はグラス・ホッパー対全日本の試合を東京へ上京して観戦され、我々にいろいろその様子を話された。この頃本校グラウンドは工事のため使用出来ず、神宮グラウンドを借りて練習、新年最初の試合は2月19日神宮で中京商高と一戦を交え天候全く快晴で軽快なプレーで中京商高を圧倒した。本校4対0中京商高。続いて26日に瑞陵高を2対0で、また3月16日明和高と対戦8対1で楽勝した。4月下旬の尾張地区大会には、抜群の成績で優勝の栄誉を獲得した。準決勝戦本校5対0南山高、決勝戦本校5対0東海高。

(1回卒 2年在籍 大口勝正 記)

主な戦績

昭和29年度

国体予選 準決勝 本校0-4 挙母高

選手権予選 準決勝 本校0-3 挙母高



尾張地区大会成績

熱田 8-0 菊里

熱田 7-0 津島

熱田 5-0 南山

決勝戦

熱田 5-0 東海

第2回 体育祭《校誌 2号より》

昭和29年10月5日 晴 下出義朗 記

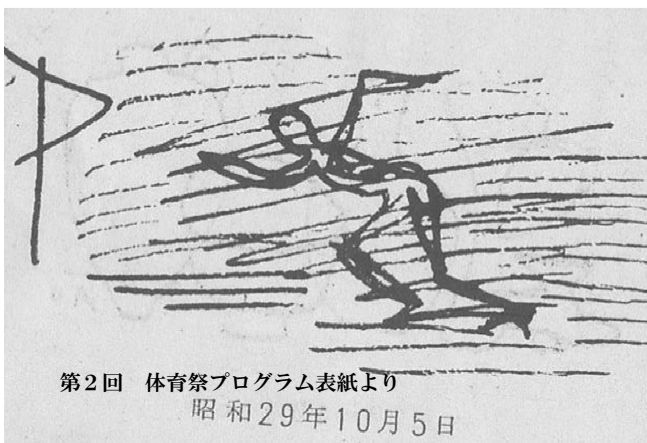
日頃の成果をこの美の祭典に、悔いなく発揮せんものと生徒一同準備に練習におこたりなかった。ただ天候のみが我々を悩ましていた。実際、後から振り返ってみると前日まで不順な天候が続き、その後も連日の雨をみたことを考えると、まるで自然のからくりのようにこの日だけが絶好のスポーツ日和だったわけだ。こんなわけで我々の意気が益々高まり、素晴らしい成果を収めることができた。

昨年とは違い生徒数も倍になり、青空の下むしろ爽やかさをおぼえる冷たい風が吹く運動場、力一杯技に展開する勇姿はまさに本校の輝かしい将来を目のあたりに見るが如きだった。

喜々とした男子全員の百米競争にスタートを切ったプログラムは続々に進展し、障害物、

借り物、瓶碍り競争は見物席の人々の爆笑のるつぼにおとしいれた。それにつづく、麗しい乙女のダンスは男性的な他の種目に比べて和やかな空気を漂わせ、一点の華を添えた。

又走高跳に於ける1年の志治君の1米60の



記録は誇ってもよい。今後の目覚ましい活躍に期待する。

5千米競争はこの日の華だけあって最高の人気を集め、湧き起さる声援の中を黙々と走り続ける選手の汗ばんだ顔、栗色の足、純白のシャツ、色とりどりの鉢巻は今なお臉に残っている。

最後のクラブリレーは、様々な奇抜な趣向で見物席の度肝をぬき、トラックを逆回りするものや、途中でへたへたと倒れてしまうものや、

特に文芸クラブはアメリカの土人の恰構にカッパの皿をのせ振鈴を鳴らし、ブラカードにモデルスクールや教育方針をもじつきたものを書いて走るなどセンスのあるところをみせて喝采を博した。

一日の行事をとどこおりなく終えて表彰式、並びに校長先生、PTA会長の挨拶をする頃は工場のサイレンが鳴り響く夕方だった。

第2回長距離競争大会成績(太字サッカー部員)

昭和30年2月1日 快晴 午前9時45分

男子の部 コース距離8キロ

- 1位 2年 久田 幸汎 29分10秒
- 2位 2年 田中 享 29分25秒
- 3位 1年 深谷圭一郎 29分34秒
- 4位 2年 前田 裕彦 29分54秒
- 5位 1年 田中 靖二 30分14秒
- 6位 2年 村瀬 勝久 30分19秒
- 7位 2年 熊崎 富次 30分23秒
- 8位 2年 杉山 義彦 30分35秒
- 9位 2年 田中 浩 30分39秒
- 10位 1年 形山 清司 30分45秒

1回生 (昭和31年3月卒)

校誌『熱田』3号 蹴球より

3年目の我がクラブは、後記のように輝かしい、しかし対刈谷高戦の惜敗という一点心残りな課題を残して終った。熱心に声援をおくって下さった諸君に対するお礼と、僕ら自



身の反省の為に、一年を回顧し、更に僕等の得た「サッカーとは何か」という話をしよう。

3月の尾張地区大会(新人戦)

圧倒的な戦績で優勝した本大会は、その後
の我クラブを運命づけた試合であった。対等の条件ではじめて他校と相対した大会、それまでに傾注して来た努力による自信と、それだけにおのずからわいてくる不安との中で、勝ち取った優勝という事実は、僕等の忘れ得ない感動である。不安とは自信の影のようなものだ。自信が大きくなればなるほど、それに伴う不安も大きくなる。こうして優勝は僕等に「おごり」の心でなく団結心と技術の必要を痛感させた。ここで、対刈谷高戦が僕等の唯一の問題となってきた。5月鶴舞グラウンドの一戦。思う存分戦った。タイム・アップ寸前まで両者得点なく観衆を沸かした白熱の試合、1対0で惜敗したが、ここに僕等の自信と闘志が確立した。そして、サッカーに対する信念が。

《サッカーは一つの激しいドラマだ》相対立する二つの意志が、ボールを中心として伸

縮し、回転し、躍動する見事な三次元のドラマ、ここではクラブ員相互間に利害打算の不純物が混入した瞬間に平衡が破れる。試合はクラブ全体の力の表現であろう。

夏の尾張地区大会に再び優勝した我がクラブは、東日本大会への推薦を受けた。更に国体予選への意欲に燃えて合宿に入り、多くの人々の理解と援助により、全日本のメンバー



関西学院大コーチと記念写真 前列左4人目 加茂 豊氏、一人指いて岡本久敬氏、鶴見先生、平木隆三氏

である関学の平木、岡本、加茂の3選手をお迎えし、本格的な練習に入った。血の通った練習とはこういうものだと思った。文句ぬきの烈しい練習、真剣な実践即応の質疑研究、青空のようなわだかまりのない談笑、起居を共にした一週間の生活は本当に楽しかった。頭脳と情熱、精神と肉体の完全に結合した無駄のない3選手の美しいフォーム。僕等はサッカーを見た。魅せられた。先ず闘志だ。そのために団結した。怒った、笑い合った、また喜び泣き合った。

かくて、東日本選手権大会。第1戦、山形高を3対0で破って第2戦、晴の神宮グラウンドで宇都宮高と対戦した。七分三分に押しまくり戦いぬいたにもかかわらず、不運の1点をとられて敗れた。僕等は泣いた。心から泣いて来年の重来を誓った。

僕等はもうサッカーから離れられないであろう。その涙はサッカーへの情熱の涙なのだ。

国体予選。ぬかるみの刈谷高グラウンドで予想通り本校は刈谷高と優勝戦で対した。大阪から平木さんが飛んで来られ、名古屋クラブの方々、本校の先生方、生徒諸君の声援の中で開始されたこの一戦は、惨めな完敗に終わった。試合に弁解は無い。敗けたという実感と

底知れぬ寂寥を感じた。刈谷高の強さをはっきりと知った（刈谷高はその後、国民体育大会で全国優勝の偉業を遂げた）と共に、そういう内面的な危機と苦悩を破るために鶴見・佐野両先生と共に目に見えぬ戦を乗り越えねばならなかった。これがスポーツの世界。

10月の県大会に三度刈谷高と優勝を争った。気分的にも一つの危機を乗り越えた僕等は、十分に実力を表出して延長、また延長と90分の大接戦を繰り返して、観衆を熱狂させた。4対3で破れたけれども不思議と悔はなかった。

11月、全国大会の予選、これこそはと全力を出したが、不運の連続で、試合内容の烈しさに比して点は4対1とひらいて終わった。こうして一年間の全スケジュールを閉じたが、12月下旬、全国大会出場のため西下する途次、秋田商高が本校に立寄った。1対1の別開けであったが、秋田商高は、全国大会で優勝戦まで勝ちぬき健闘した。

サッカーとは、時間（試合時間）・空間（フィールド）更にそれを貫く抽象的な一本の線（ルールという運動の倫理）に規定されつつ、それを支配して構成する熱情的な幻想であり、ダイナミックな劇である。美しい幾何図形であり、物理学であり、僕等の闘魂が生み出す、微塵の虚偽もない純粹の人生だ。あせってはいけない。不断の熱情と友愛に満ちた結合こそ必要だ。偉業は果実のようにゆっくり実る。激しい楽しさでやり抜いている僕等は幸福だ。

（1回卒 前田裕彦 記）

主な戦績

昭和30年度 32戦 26勝5敗1分

東日本選手権 1回戦 本校3-0山形高
2回戦 本校0-1宇都宮高

県外等の対抗試合(大学・社会人含む)

熱田4-0上野高 熱田1-1秋田商高

第3回長距離競争大会成績(太字サッカー部員)

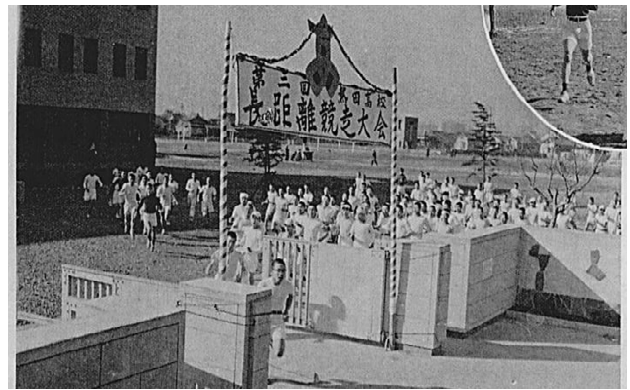
昭和31年1月28日 晴 午前9時45分

男子の部 コース距離8キロ

- 1位 3年 田中 享 28分18秒
- 2位 1年 永田 洋一 28分22秒
- 3位 3年 久田 幸汎 28分37秒
- 4位 1年 小椋 幸征 28分46秒
- 5位 2年 深谷圭一郎 28分57秒
- 6位 3年 熊崎 富次 28分57秒
- 7位 1年 竹内 正 29分01秒
- 8位 3年 村瀬 勝久 29分06秒
- 9位 1年 広田 義憲 29分33秒
- 10位 3年 杉山 義彦 29分33秒



第1回卒業証書授与式挙行 (31・2・28)



熱田高等学校応援歌

- 1、朝日ひたさす 緑の森に
誓う我等の 決意はかたし
鍛えし諸腕 振わばや
熱田の力 振わばや

- 2、紺の旗風 高鳴る庭に
競う我等の 鉄脚おどる
磨きし妙技 示さばや
熱田の力 示さばや

- 3、茜かがよう 千年の空に
勝てる我等の 名誉はたかし
栄光の時 讃えばや
熱田の力 讃えばや